

11月21日 第12日目

帰国まであと4日。盛岡は初雪だったそうであるが、こちらは最高気温が約30℃とまだ真夏のような毎日が続いている。

そんな中、昨日から体調を崩していた者たちの容態が思わしくなく、朝一で病院に連れていくことに。ガイドである黄さんに相談したところ、日本語が通じる医師のいる病院を紹介してくれることになり、元気な9名は予定通り政治大学附属高校（厳密には高級中学校であるが以下日本風に附属高校と記す）へ、そして3名はタクシーで病院へ。市内の中心部にあるなかなか大きな総合病院で、我々のような外国人向けの診察室があったかと思えば、その隣にはエステルームがあったりするという、日本ではなかなかお目にかかれなような総合具合であった。

一番の心配は言語であったが、最初の受付でこそ英語を使ったものの、その後は問診にいたるまですべて日本語で対応していただくことができた。高熱が出ていたものはインフルエンザの検査も受けたが、結果は幸い陰性。解熱剤とビタミン剤、めまいの症状があった者はその薬をもらい、ドミトリーに帰還。午後は丸々休養に充てた。これを記している夕方時点では、発熱していた者たちも薬の効果かほぼ平熱となり、幾分表情もよくなったように感じる。他のメンバーも含めて健康状態については引き続き注視していきたい。余談であるが、我々が訪れた台安醫院の外国人用診察室は茶水のみならずコーヒーまで飲み放題で、朝日新聞はじめ主要な国の新聞を完備。待合室もカフェのような雰囲気、不安な中とはいえ非常にリラックスできる空間だった。世界に開かれた都市にはこういうものも必要なのだな、と思わぬところで学ぶ午前中となった。

この間政治大学附属高校では順調に交流プログラムが進行。以下その様子を報告する。

到着すると玄関ではすでに20名弱の生徒さん方が待ってくださっており、我々を歓迎してくれた。そのまま歓迎式が始まり、向こうの校長先生、こちらからの代表者が相互にスピーチ。続いて政治大附属高校の代表生徒が、英語での学校紹介と日本語での歓迎の挨拶をしてくれた。あまりにも流暢な日本語を話すので声をかけたところ、父が日本人とのことであった。

次は本校生徒によるプレゼンテーション。時間が少しあるということで、急遽学校および岩手の紹介を行うことになった。突然ではあったが、花蓮の高校で一度経験していたこともあり、生徒たちはこなれた感じで現地の生徒を巻き込みながら一緒に郷土芸能であるさんさ踊りを披露、冒頭から和やかな雰囲気の交流となった。

その後は附属高校の授業体験。1時間目はVR体験の授業であった。VRとは仮想現実の略であり、アイマスクのような眼鏡をかけて見るとそこは仮想の世界。エレベーターに乗ってドアが開くとそこは超高層ビルの外で、わずかばかり張り出した細長い棒の上を歩き出す。下を見るとき目がくらむ高さ。当然見る向きを変えれば風景が変わり、おそるおそる歩き出すものの、多くの生徒は足がすくんでうまく歩けない。さらに前に進むとついに地上へ落下。落下の怖さで悲鳴を上げる者も。

また、体験者が見えている景色を、まわりの生徒はモニターで見ながら体験者の動きを注視するという構図。何とも楽しいものであった。災害時の避難シミュレーションに関するものも体験できた。実際の授業では、今回体験したゲーム的な利用でなく、危険な薬物を使う化学実験の試験をVRで行うなど、様々な分野でVRを活用しているようだ。日本でこのような取組をしている学校はどれくらいあるのだろうか。大変先進的であった。

2時間目は拓本をとる授業を受ける。校舎外のテラスの埋め込まれている石の刻印を拓本として写し取る作業を行った。完成したものはお土産としてそれぞれの生徒のもとへ。作業後の時間では台湾と日本の生徒同士が写し取った漢字の意味を英語で説明しあうなど大いに盛り上がっていた。相手の深い知識に触れ、互いに尊敬しあう場面も見られた。

午前中の交流を終えると昼食に。今日のメニューは巨大なチキンとタラのフライがご飯の上のついた弁当。迫力満点である。一緒に授業を受けた生徒も自分の弁当を持参しみんなでランチタイムを過ごした。

その後、午後の時間帯は動物園へ場所を移しての交流となった。私たちが滞在しているドミトリーの最寄り駅が「動物園駅」。台北市立の非常に広大な動物園で、ガイドさんいわく「ゆっくり見たら二日かかる」とのことである。それも納得してしまうくらいの広さ。しかし、日本の動物園に比べ、動物を探す難易度が非常に高い。大きいものならまだ見つけやすいが、小型になるとはっきり目視できる方が少ないくらいの分かりづらさである。それと、園内にセブンイレブンやマックなど、他の企業が入り込んで商売をしているところなんかも、日本の感覚でいくと新鮮に映る。

そんな動物園で、まずは1時間ほどかけて台湾固有の動物たちを、園の専門のガイドの案内で見て回る。説明は中国語のため、同行した附属高校の生徒たちが英語で通訳をしてくれた。予定の時間が経過したところで、グループに分かれてそれぞれ自由に園内を散策しながら親睦を深める。ほぼ3時間歩き通しでかなり疲れたことと思うが、最初の頃は本校生徒、附属高校生徒それぞれが固まって移動していたのが、帰ってくる頃には打ち解けた者同士肩を並べて歩いて来たのを見る限り、充実した時間を過ごせたものと思われる。

そしていよいよ明日は全体を通して、高校生・大学生との交流プログラムの最後となる1日。帰ってきた生徒たちはグループ毎にプレゼンのスライドや原稿を作成し、少しでも多くのデータを求めて聞き取りに赴いた者も。

この研修の集大成を見せてくれること、そして願わくは今体調が思わしくない生徒たちも、順調に快方に向かい、たとえ一部だけでも最後の交流に参加できることをただただ祈るばかりである。

VR体験的一幕



記念拓本



台湾のお弁当



動物園での記念撮影

